

尾張七宝について

1. 七宝の歴史

七宝（七宝焼）は一般に銅や銀などの金属素地にガラス質の釉薬（フリット）を高温で焼付けした美術工芸品をいい、彩色の花瓶や皿、額、酒器などが製造されています。

七宝の起源は、紀元前古代エジプトに遡り、日本にはインド、中国、朝鮮を経て到来したものと考えられています。日本最古の七宝は、7世紀後半に築造された奈良県高市郡明日香村の牽牛子（けんごし、あさがお）塚古墳から出土した「六葉花文亀甲形金具」とされています。七宝の名品として、正倉院に収蔵される「黄金瑠璃紺背十二稜鏡」が広く知られています。これらの遺物は国外で製造されていたようです。

日本における近代七宝の開祖とされるのが京都の金工平田彦四郎道仁です。慶長年間(1596-1614)に平田は朝鮮工人より七宝技法を伝授されたとされています。平田は幕府の技芸員として、鐔などの優美な刀剣小道具類を多く制作しました。

2. 尾張七宝

天保年間(1830～1843)、尾張国服部村（現名古屋市中川区富田町）の金工梶常吉が、オランダ船により輸入された七宝の皿を手がかりに製法を苦心して研究した末、七宝の製造に成功し、尾張七宝の礎を築きました。

明治以降、尾張地方を中心に七宝の製造が広まり、ドイツ人技師ワグネルの師事を受けて釉薬が改良され、透明で鮮やかな色彩の七宝ができるようになると、内外での評価、需要が著しく高まるようになりました。

第二次世界大戦中には銅の使用制限や奢侈品の販売制限などがあり、業界は危機的状況に陥りますが、業界が一丸となり技術保存に努めました。空襲により名古屋の七宝業は焼失しますが、戦後、進駐軍の土産品として七宝が好まれ業界は好況期を迎えました。

3. 尾張七宝の製造技法

尾張七宝の代表的な製造技法は「有線七宝」と呼ばれ、以下の工程で製造されます。

薄銅板を打出しして花瓶などの形状に工作します。表面を磨き、墨などで模様を下画して、線上に銀線をふのりで植え付けます。

透明釉薬を銀線上にのせ、焼付けして銀線を定着した後、銀線でできた区画線の内外に色釉薬を施し、乾燥し、800～850の温度で4～8回程度、焼付けを繰り返して彩色します。

焼成後に表面を目の粗い砥石から細かい仕上げ砥石や木炭を使って段階的に研磨して製品とします。花瓶などでは縁に覆輪金具を取り付けたり、メッキを施したりします。

このように七宝は多くの工程を経て美しい工芸品として生み出されます。（図）

その他に、素地表面に線を植え付けない、または制作過程で線を取り除く「無線七宝」、釉薬を盛り上げて絵柄を立体的に見せる「盛上七宝」、銅でできた素地を酸で取り除く「省胎七宝」などの技法が使われます。

4. 尾張七宝の現状

尾張七宝は平成7年に通商産業省（現経済産業省）から「伝統的工芸品」の指定を受け、産地では地域の優れた文化を保持するとともに、ゆとりと豊かさをもたらす質の高い製品を制作しています。

現在、名古屋市、あま市（旧七宝町）、西春日井郡枇杷島町を中心に、21業者が花瓶、香炉、額、飾皿、宝石箱などの美術工芸品やアクセサリ類などを生産しています。あま市内には、「尾張七宝」をテーマとした、「見て」「触れて」「学んで」「体験する」ことができる総合施設「あま市七宝焼アートヴィレッジ」があります。

あま市七宝焼アートヴィレッジ

あま市七宝町遠島十三割 2000

<http://www.shippoyaki.jp/index.html>

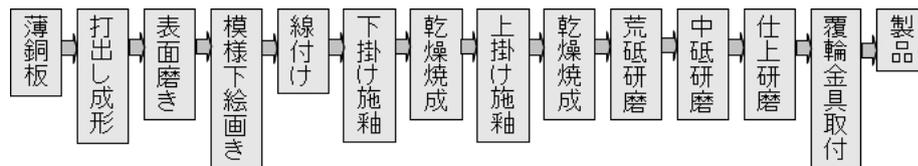


図 有線七宝（花瓶）の製造工程



工業技術部 材料技術室 伊藤 賢次（0566-24-1841）

研究テーマ：VOC 簡易発生法に関する研究

担当分野：無機材料（窯業、セラミックス）・環境